

発言する!

月刊

9

2009
September
No.158

俳句界

大特集

今こそ抒情俳句の復興を!

先人達に見る抒情俳句の世界

村上鬼城 日野草城 水原秋櫻子 久保田万太郎 ほか

俳句と川柳の 境界線

アンケート◎あなたにとって

“川柳に近い俳句”

“俳句に近い川柳”とは?

◎対談

佐高信の甘口でコンニチハ!

と
立川談四樓

(座談会)

「俳句と弟子 落語と俳句」

魅惑の俳人たち選

草間時彦

現代俳句の“かるふ”の
位置を決定した男

特別作品33句

宇多喜代子

俳句界NOW

田島和生



俳句と川柳の境界線……。

その線をはっきりと引くことは容易ではない。

しかし、たまには、互いの作品を読んだり、話を聞くことも必要であろう。

今回は川柳作家からの論考、俳句・川柳からのアンケートを掲載した。

さまざまな意見を聞くことで、自分にとって俳句とは何なのか、

自分の目指す俳句とは何なのか、を考えるきっかけにもなるのではないか。

俳句と川柳の境界線

◆論考

尾藤一泉（川柳作家）

本田智彦（川柳作家）

◆アンケート

あなたが限りなく、川柳に近い、と思う俳句
あなたが限りなく、俳句に近い、と思う川柳

俳句と川柳の境界線

1

尾藤一泉

俳句と川柳の境界線については、既に多くの諸賢が言及しており、今更私ごときが申上げる立場にないが、川柳に多少拘つてきた者として機会を活かしたい。

最初に「俳句と川柳」ということを意識させられたのは、昭和五十四年一月十三日、第一回・国公立大学共通一次試験の「国語」問題であった。東京は大雪。かじかんだ手で問題を開くと、蕪村の俳句と古川柳とが取り上げられていた。

化けさうな傘かす寺のしぐれ哉

蕪村

化けさうなのでもよしかと傘をかし

川柳

問題文中「蕪村のは確かに詩である。……だが、あとの川柳の方はどうだろう。これは

詩であろうか」という一節ほか、全体を通して、古川柳だけでなく、既に句作者として現代川柳の表現までも体感していた私にとって、とても違和感があった。また、それぞれの句の下に「蕪村」と「川柳」とあるが、(蕪村は作家名であり、川柳は点者名ないしジャンル名。この併記の仕方は変だ……)などと、入試という極限状態にありながら、余計なことを考えていた若い自分がそこに居た。

俳句の文芸誌や機関誌を見ると、現代俳句と称される部分では、私どもの行っている。現代川柳とほとんど表現、形式などの領域で重なりがある。作者名を外して、独立十七音として鑑賞した場合、俳句か川柳か、区別は困難なものがある。

たとえば、先だって川柳学会において取り上げた「川柳と俳句」の中で、俳人・秋尾敏氏が取り上げて比較した句のひとつ、

内乱の予感に顔のない骸

一泉

ヒロシマにブレンドされている何か

敏

を見るまでもなく、現代。という空気が、気分を表現しようとすれば、ジャンル名の違いはあっても、作者のスタンスは、おのずと近づいてくる。

また、俳句においては、伝習的な。有季定型。といった縛りから、無季とか自由律、口語俳句などという形で、従来の形式的アイデンティティーからの逸脱と視座の拡張が行われている。川柳においても、古典的客観的視座（古川柳から狂句期）から明治復興期（明治四十年代）には、「主観」の目を獲得（新傾向川柳）、その視野を広げ、続く大正からの「新興川柳」運動では、それらが理論化さ

れて、さらに純詩的川柳とプロレタリア文芸の思想性に立脚した作品が生まれ、戦中は「翼賛川柳」として体制とともにあり、反動で戦後には、華々しく個性を輝かせる作家が生まれ、多様化した。

その中で、川上三太郎により明確に位置づけられた「時事川柳」の視座は、伝統的客観の延長線上にあったが、女流作家の増大により生まれ、時実新子らに代表される「情念」の視座、さらには、尾藤三柳らにより代表される人間の「精神」に迫る視座は、客観的視座しか持たなかった伝習川柳の領域を広げ、ニンゲンの内なる世界と向き合って、表現視野をマルチなものとした。二百五十年間に川柳が獲得してきた広がりである。

したがって、伝統的な形式を重んじる俳句から、現代俳句の諸相も含めた「俳句」というジャンルと、マルチな表現視野を獲得した今日の「川柳」というジャンルを比較すれば、

伝統的な表現・形式を遵守した部分では、判りやすい境界が引けるとしても、多様化した表現内容や形式の部分では、まったく区別のつかない十七音となっているといっても過言ではないように思う。

昨年の口語俳句協会の「口語俳句五十年——成果と展望」に、川柳家の立場からバネリストとして参加した際の強い印象は、同日、口語俳句協会賞を受賞した重富佐代子氏の作品紹介の評言の中に「無定形で口語表現を優先」などとあり、意識的な定型への別離さえ感じられ、同じ時配られた田中陽氏の作品には、律がない。

鮎がまとわる置戸の町は西部に似る 陽

勿論、川柳においても内在律の模索や、長律、短律の作品への展開もないわけではないが、同会の「俳句原点」の諸作品をみると、一律に定型への「離反」が感じられる。作者

の呼吸としての「口語」をめざす事が文語や古い音数律など器を溢れることは理解できるが、これが、現代の俳句の「総て」でないことも知っている。公共放送での俳句番組では、伝統的な有季定型が多いし、俳句の各結社の機関誌を見れば、いわゆる伝統の俳句から現代の俳句まで、それぞれの主張、立場に立脚した表現・形式は、私どもの川柳の吟社間の差異より大きな違いが感じられる。むしろ俳句というジャンルの中にこそ、境界が存在するとさえ思える。

共通一次の話題に戻るが、今思えば、俳句を特徴付けるのは「蕪村」という。作者名であり、作者の感動を読者が追体験すること求められる。「川柳」は、発祥から、無名性（アノニミティ）が特長のひとつであり、作者の口を飛び出した十七音のフレーズは、読者により共有され、作品自体が読者の所有にもなって伝播する共感と社会性にあつたよう

だ。作者は作品の後ろにある。だからこそ、

孝行のしたい時分に親はなし（講風柳多留 二十三篇23丁）

相性は聞きたし年は隠したし（講風柳多留 六篇41丁）

等、多くの人口に膾炙したフレーズが生まれ、成語や諺のように耳に伝わり、これら共感のフレーズには作者名は不要であったのだ。いや、無名性のサブカルチャーであるからこ

そ、「サラリーマン川柳」等が広く共感の輪

を読者に広げることができたのかもしれない。

勿論、文芸性や作家性も現代川柳の重要な要素であることは事実で、これを捨てる訳にはいかないが、この共感の社会詩として川柳が広く現代社会に受け入れられていることに川柳家として誇りをもちたい。これが、ひとつの俳句との境界ではなからうか。